

阪神・淡路大震災の経験が伝える

活動

ノウハウ

平成23年3月11日、日本を襲った東日本大震災。日頃、レクリエーションに携わる皆さんも、被災者のために何かしたいと考えているのではないのでしょうか。そこで今回、平成7年に発生した阪神・淡路大震災でレクリエーションを通じたボランティア活動をされた方々に活動のポイントやノウハウをお聞きしました。

避難所や地域ごとに異なるニーズ

―長尾さんはレク協会の活動の前から個人でも活動をされていました。

長尾…地域や避難所によって生活支援の濃淡がどうしてもあり、求められることが異なってきました。状況によっては「帰れ、いらん」と言われることもありました。だから最初は、その場所がどんな雰囲気なのか、自分自身でできることはあるのか、自分の足で歩いてまわりました。

石田…地域がしっかりしていると外からのボランティアを必要としない場合もあります。今回の震災は、地震、津波、原子力発電所という3つの被害があったので、それぞれで求められることが違うでしょう。

組織的に地域とつながる

―石田さんは震災後すぐに仙台市災

害ボランティアセンターに行かれました。

石田…今回は各県や市でボランティアセンターが設置されているので、そうした機関と連携して活動することが必要です。ボランティア活動をする側にもある程度の組織として関わることを求められています。

長尾…阪神・淡路大震災のときも、個人でいきなり活動を始めるのは難しかったです。組織的な信頼性があって、避難所や地域の軸となっている人とつながって動くことが大切でした。

石田…ただし、今回は被災の範囲が広いので、そうした公的機関の支援を受けられない被災地があることも想定しておく必要があります。

拠点を設けて ニーズを拾い上げる

―石田さん、水流さんは朝日新聞厚生文化事業団の活動を展開していま

した。

石田…実は何をすることが最初に決まっていたわけではないのです。現場にボランティア基地という拠点を設けて、そこでニーズ調査をして、それに合わせて活動を展開しました。その結果が、子どもたちと遊ぶ「みんなで遊び隊」や「高齢者と話し隊」になっていきました。

水流…「青森からリンゴが届いた」「こんな特技のある人がいる」ということから、活動を考えていったこともありました。

長尾…最初はたこ焼きを焼いて提供することから始めて、その避難所の人たちに受け入れてもらい、それから子どもたちの遊びや高齢者の体操などを始めていきました。

石田…レクリエーション・ボランティアの場合は、こちらのやりたいことが現場で受け入れられるかが難しい。最初は、物資の搬入や炊き出しなどの生活支援を手伝うなど、地域のニーズに

桃山学院大学社会学部社会福祉学科・教授 石田易司さん
南海福祉専門学校・専任講師学生部長 水流寛二さん
福祉レクリエーション・ワーカー 長尾正子さん
(写真左から)

